伊豆こけし (銀山店と工芸館)

1900 年代初期が舞台となっているテレビドラマ「おしん」は、山形県の田舎出身の少女おしんの物語です。おしんは困難な境遇と、日本における激しい社会変動の中を生きてゆかねばなりませんでした。おしんには、子どもの頃、生家を離れても家族を思い出せるよう、銀山こけしが与えられました。こけしとは、簡素な木製の伝統人形です。伊豆家は、三代にわたって、これら木製の同じ人形を手作りし続けてきました。このこけしは、銀山を象徴するものになりました。

伊豆こけしは、1922 年に、銀山温泉で、小さな工芸店として始まりました。この店では、ひとつの木材から形を作り、着物で正装した子どもに似せて絵付けをした伝統的な木製人形を販売していました。銀山温泉は、『おしん』の舞台でした。1983 年に「おしん」が放送されると、このドラマは日本文化の基準となり、銀山の人気は高まりました。番組で採用されたのが伊豆こけしで、伊豆こけしは、「おしん」の知名度を利用して、「おしんこけし」が発売されるようになりました。これは、「おしん」に出てきたこけしを模したものです。「おしんこけし」は、おかっぱの髪型に羽根が描かれているという点で、他の人形と異なっています。この事業が成長すると、需要に応えるため、1988 年、銀山温泉へ続く道路沿いに「工芸館」が開店しました。「工芸館」では、予約すれば、こけしの絵付け体験ができます。

伊豆こけしは、「おしんこけし」に加えて、「誕生こけし」というもうひとつの商標登録されたこけしを販売しています。「誕生こけし」は、子どもの誕生を祝うものです。その子どもの誕生時の正確な体重と身長に合わせて特注されます。「工芸館」では、伝統的な人形だけでなく、その他手作りの木製品を多く販売しています。